

さんびの歌

第三集

藤本光夫

さんびの歌第三集に寄せて

菅原 一榮

人が神を知ったとき、そして、その愛のすべてが人間にそそがれているということを知らされたとき、人は神の前にひざまずきあふれる感謝を表わすのです。やがてそれは美しい調べとなつて人のこころを満たし、あふれる思いが一枚の絵となつて見る人の目を輝かせることでしょう。しかし、たましいの奥底から突き上げてくる神への賛美は感謝とともに清らかな一っぺんの詩となつてしるされるのです。

あなたがこの詩にふれるとき、神の愛と主イエス・キリストの恵みによつてのみその一生を生きようとしている一人の人のたましいの幸いを知るでしょう。そして、それがあなたにとつて最上無二の人生であることを神のみ前に受け入れ生きることが作者の願いなのです。

ここに《さんびの歌第三集》が刊行されるにあたり、この詩があなたの神への賛美となりますようにならう。

目次

| | |
|----------------------------|----|
| 私の主 イエス・キリストに とこしえにみ榮あれ | 一八 |
| 草笛になりたい | 一 |
| 清めていただく | 二 |
| 青い空よ | 三 |
| 「友よ」と呼んで | 四 |
| 嵐 | 五 |
| あなたとお会いして | 六 |
| 主のときが満ちて | 七 |
| 引き上げてくださる | 八 |
| 二千年前の夜明け | 九 |
| 愛に | 一〇 |
| ピスガのモーセ | 一一 |
| ダニエル | 一二 |
| 一番悪いやつ | 一三 |
| ヨナの憂い | 一四 |
| 人の姿をおとりになつて | 一五 |
| 心を開く方があつて | 一六 |
| ただ感謝して | 一八 |
| 言わないでください | 一九 |
| お生まれになつた救い主 | 二〇 |
| 御国のことばではなく | 二一 |
| ヨルダンよ | 二二 |
| 二作目 | 二三 |
| 主が御手を伸ばされる時 | 二四 |
| 振り向くと | 二五 |
| 春 | 二六 |
| 生かしてください | 二七 |
| 賜物 | 二八 |
| 心はどこにでもあるが | 二九 |
| 向かわせてください | 三〇 |
| この驚くべき愛 | 三一 |
| 愛がなければ | 三二 |
| 現わしてください | 三三 |
| 川 | 三四 |
| 世界の覇者に | 三五 |
| あなたの僕となるために | 三六 |

| | | | |
|--------------|----|-------------|----|
| 松戸 | 三七 | 新しい世界 | 五八 |
| 安息のために | 三八 | 神様の時を待つ種子たち | 五九 |
| 泣いておられた | 三九 | 夕陽 | 六〇 |
| ペヌエル | 四〇 | 十字架の時 | 六二 |
| ぬくもり | 四一 | 新しい歌を | 六三 |
| 渴ききつた骨 | 四二 | ユダの誤り | 六四 |
| お示してください | 四三 | 神様の涙です | 六五 |
| 主が言われました | 四四 | 五十六才の独り言 | 六六 |
| 美しい冬 | 四五 | よそ行き | 六七 |
| 主は御座に着いておられる | 四六 | 新しく生まれなければ | 六八 |
| 幾多の道があります | 四七 | 示されました | 六九 |
| スペクトラム | 四八 | 探しておられます | 七〇 |
| 或る日私は | 四九 | 人が何も出来ない時 | 七一 |
| 人の美しさは | 五〇 | 野良犬 | 七二 |
| その日 | 五一 | み栄えのために | 七三 |
| 叫んでくださった | 五二 | 主の愛が現われました | 七四 |
| 忘れる恵み | 五三 | 捕えようとしても | 七五 |
| この位は | 五四 | 知っておられます | 七六 |
| 和解 | 五五 | 対峙させてください | 七八 |
| おいでになりました | 五六 | 同じではない | 七九 |
| 心が開かれた時 | 五七 | み業を思うと | 八〇 |

新しい歌を主に歌え。

全地よ。主に歌え。主に歌え。御名をほめたたえよ。

日から日へと、御救いの良い知らせを告げよ。主の栄光を国々の中で語り告げよ。その奇しいわざを、すべての国々の民の中で。

まことに主は大いなる方、大いに賛美されるべき方。

(詩篇九十六篇 一〜四節)

私の主イエス・キリストに

とこしえにみ栄あれ

草笛になりたい

道端に萌え出た
一枚の葉っぱが草笛になると
操る人の手の中から
際限もなく
夢が生まれる

人の力で
人の力でと
空しい夢を仕組んだ
サタンの手の中で
夢の犠牲になるのではなく
道端に萌え出た
名もない葉っぱになりたい

ただの葉っぱであつても
神様に摘まれて
草笛になつたら
巧みに操るみ手の中から
いのちの歌が
生まれてくるだろうから

ただの葉っぱであつても
草笛になつて
神様のみ愛を奏でて
死の影の谷をさまよう方々に
十字架の上で苦しみぬいて
み国をくださった方を
教えてあげたい
新しい世界があることを
教えてあげたい

清めていただく

肉を切るように

心を切る

心の悪い部分を

切り取って

十字架につける

切っても

切っても

悪い部分が次々にできる

僕の心

全身らい病患者のように

全部十字架につけて

イエス様の御血で

清めていただく

青い空よ

何と広いのだろう

何と深いのだろう

私のとげとげしい心に

青い空よ

イエス様のみ愛のような

君の安息を与えてくれ



K

「友よ」と呼んで

あんなにひどい仕打ちを
受けながら

なぜ主よ

裏切り者のユダを

「友よ」と

呼ばれるのですか

「友よ」と呼んで

ユダと同じ

すべての失われた心に

いのちを与えようと

十字架にまで

進まれたのですか

嵐

空の果てが黒く濁って

小鳥たちが

寝ぐらに急いでいた

人は何も知らなかったが

森がざわめき

虫たちが

用意を始めていた

人は何も知らなかったが

小鳥たちに優り

虫たちに優り

神の形に形造られた人は

来ようとしている裁きのために

間に合うだろうか

